芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.66　60・9

発行人・挾間正年　編集人・高塩　至

もくじ

芸術文化基金事業の成果と課題
会長　挾間正年……1
―― 特集、芸振加盟団体の活動 ――
番傘川柳連合会・県民オペラ協会……2
大分市子ども劇場協議会・大分喜多会……3
基金鑑賞事業、ファミリー芸術劇場……4
さざ波、芸振と芸館へ……5
県内の文化施設、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館……6
市町村文化活動の現状、三重町文化団体連絡会……7
スバルと人（その７）菅久、記録、お知らせ……8

芸術文化基金主催事業の成果と課題

大分県芸術文化振興会議
会長　挾間正年

多くの県民の方々からの募金により完成した大分県芸術文化基金は、本年度から事業が実施できるようになりました。

基金による事業は大きく分けて、主催事業と芸術文化団体の自主的な事業に対する補助事業の二つとなります。

主催事業は、地域における芸術鑑賞機会の拡充を図るとともに地域文化の向上を目ざし、芸振が主体となって企画する事業であります。今年度は学校巡回公演・ファミリー芸術劇場・文化キャラバンの３事業を実施中であります。

学校巡回公演は去る７月15・16日の両日、西国東郡、東国東郡の小学校４校で、大分大学混声合唱団コールレティッヒのコーラスを、日田市、大分郡内の学校及び公民館４か所で県洋舞踊協会によるバレエを公演しました。学校巡回公演は芸術文化基金事業の最初の事業ということもあり、その成果が注目されておりましたが、お蔭様で好評のうちに終了することができたことを喜んでいるところであります。

各会場とも殆んどの子どもたちが〝生〟の舞台芸術を鑑賞する機会は初めてということもあり、目を輝かして鑑賞し、舞台と客席が一体となり、公演の終わりを惜しむ雰囲気がよくわかり、私共の感動もひとしおでした。後日、今回の公演を鑑賞した多くの子供達からの礼状をいただいたばかりでなく、学校関係者からは来年も是非実施してほしい旨の申し出がなされております。

学校巡回公演については、今回の成果にふまえて来年度以降の計画を考えたいと思っております。

また、ファミリー芸術劇場は８月25日に津久見市民会館で、９月１日に竹田文化会館において開催され、また来たる10月27日には宇佐文化会館で公演することになっています。

ファミリー芸術劇場は、親と子ですぐれた舞台芸術を鑑賞してもらおうというもので、今年は、コーラスと演奏による音楽会を企画し、皮切りの津久見会場では大分市少年少女合唱団のコーラスと、グループＵＮＯの演奏、地元の津久見市合唱連盟のコーラスとミュージカルが、竹田会場ではグループＵＮＯ演奏と竹田市民合唱団、竹田市少年少女合唱団のコーラスが行われました。両会場とも出演者は、十分な練習を重ね立派な舞台を展開していただきましたが、残念だったのは、入場者が予想より少なかったことであります。

今後のファミリー芸術劇場の企画運営にあたっては、公演するテーマ、対象者、日程、地域実態への対応、ＰＲの方法などについて十分に検討していかねばならないと考えているところであります。10月27日に予定されている宇佐公演は立派なものにしたいと思っています。

文化キャラバンは地域の文化祭に文化団体を派遣するもので、今年は11月３日に劇団「つみ木座」を三重町に派遣することにしております。

基金の主催事業は、これまで十分に行えなかったきめ細かな芸術文化活動を展開することにより本県の芸術文化のより一層の発展を図っていこうとするものであり、大分県芸術文化振興会議としては今後とも全力を尽くしてまいる考えでありますので、皆様方の御協力をよろしくお願いいたします。

佐藤至良（白日会）

特集　芸振加盟団体の活動

文化団体待望の芸術文化基金も６年の年月をかけてやっと実ることになった。60年スタート、61年より完全実施に向って事業が展開されることになった。その構成団体はどうなっているのか。

どのような組織で、どのような活動をしているか、それぞれの団体に次のような項目で、現状を書いていただいた。(1)会の目的、(2)活動の概略、(3)現状と展望、(4)会員数……など、特集として今後毎号で載せて行く予定であるので、それぞれの団体は、大いに会の宣伝として活用していただきたい。(掲載順は、一応、県単位の団体、大きい団体から各ジャンル毎とした。)

大分県番傘川柳連合会〈文芸〉

機関紙「高崎山」通刊252号の実績

副会長　**疋　田　青　峰**

(1)　会の目的　大分県の川柳人口の増加をはかり会員相互の交流と研鑽の機会を持ち、現代川柳への志向と向上発展をめざす。このため年間の五大行事として、新春の集い・夏の短文学大会・婦人部の集い・秋の県川柳大会・凡柳句碑祭を行う。また傘下川柳会の育成強化に努め、その事業の援助を行う。

(2)　組織の概略　県下各地に散在する番傘川柳会及び同系列の川柳会の連合組織で大分県番傘川柳連合会と呼称する。昭和43年発会の当初は別府番傘・大分番傘を始め七つの会であったが今日では、総勢20余に増加したのである。地区に会の結成のない地域では、個人会員として入会できる事になっている。本会の運営に必要な役職員は次の通りである。会長・副会長二・幹事長・会計監査二、事務局構成は同人部・編集部・指導部・婦人部・会計部で、各部に正副部長を置く。職員は会長が依嘱し幹事長が統轄の任に当る。

(3)　会員数　400名

(4)　活動の現状と問題点

連合会主催で実施する五大行事の内、婦人部の集いは本年始めて企画し、実施されたものである。会員の過半数を占める婦人のために特設された研修の機会で、今後例年実施するものである。

毎月一回発行の機関誌高崎山は連合会発足以前に発刊され、引継がれたものである。今月号で通刊252号となっている。また数年おきに会員の合同句集「あしあと」を発刊し、近く第四号を刊行する企画が進行中である。

(5)　今後の展望　本会は逐年増加の一途を辿っては来たが、次第に老齢化し新人の進出が思うように得られない現状であるが、今後新人の誘致をはかりたい。川柳に対する誤解の払拭にも努力したいと思う。

蝶々夫人、20周年記念行事（59・10）

県民オペラ協会〈音楽〉

地方オペラの先駆　ヨーロッパ公演も計画中

事務局長　**小　長　隆　成**

大分県県民オペラ協会は昭和42年県下の音楽家、教育者が地方の音楽芸術の向上と普及を目的として発足、20年になろうとしています。

大分県民オペラは「地方の時代の文化活動の一つの道標」と高い評価をうけ、特に郷土の民話を題材にしたオペラ「吉四六昇天」の企画・制作は全国の地方オペラ運動に多くの影響をあたえました。これにより地方のオペラ団体が結集して全日本地方オペラ協議会の結成をみるにいたりました。これを記念して本年10月31日第１回オペラコンサートを東京芝公園郵便貯金ホールで開き県民オペラから２人の代表を送ります。

来年は中国武漢歌舞劇院と合同「吉四六昇天」公演を大分市をはじめ九州各会場で行う計画。また62年春ヨーロッパのインスブルックで「吉四六昇天」の独語によるヨーロッパ初演の計画があり県民オペラの会員参加がすすめられています。

オペラはあらゆる芸術の総合されたもので運営には多くの費用を要するのは世界の常識で国や公共団体の助成により成り立っています。県民オペラは多くの困難を克服してオペラの定着と音楽文化の向上に努めたいと思います。

特集　芸振加盟団体の活動

子どもまつりの日

大分市子ども劇場協議会〈演劇〉

地域に広がる子育ての
ネットワーク

3地区で3,000名の
会員数も間近か

運営委員長　池　部　紀代子

今から15年前、子どもたちの状況の悪化（受験競争、非行、低俗文化etc.）をみかねた多くの母親たちが、子どもの文化関係諸団体と手をとりあって、大分子ども劇場を発足させました。以来、「子どもに夢を！たくましく豊かな創造性を!!」を合言葉に、生の舞台芸術を鑑賞する例会活動と、仲間づくりを進める自主活動の2つを会の活動の大きな柱として活動して来ました。

なだらかではありますが、会員数も徐々に増え、よりキメ細かな運営を追及するため、現在、大分・南大分・鶴崎の三子ども劇場にわかれ、地域に根ざした運動を展開しています。そして今3,000名会員も間近かという状況になっています。現在、地域の子どもたちは、地域の大人たち全ての責任で育てようと、地域ごとのサークルの活動も活発になってきています。また会の活動を通じて育って来た高校生・中学生もふえ、子どもの集団（自治異年齢集団）づくりの先頭にたっています。今後ともひきつづき子育ての仲間をふやし、大分市はもとより、県内すべての地域に会の活動を拡げていきたいと思っております。

大分喜多会〈能楽〉

地道な年3回の定期発表
もっと、能楽部門の芸振加入を

大分喜多会代表　河　野　新　一

大分県一円を目標に発足した大分喜多会であったが、十年近く経た今日、旧会員を数えても百人に満たない。それも大分市在住者ばかりである。

当初は、県下の同好者と協調して伝承芸術の一端でも研修する事が出来れば、素晴らしい団体が生れると考えたのであるが、此の世界を支配している家伝的な慣行が、他の芸術部門が開放的で大衆と共鳴しているのに比べ、極めて因習的であるが故に、輪を広げる事の困難さを痛感している。

芸振に加盟して驚きかつ寂しく感じた事は、他流派が一団体も名を連ねていない事であった。実に不審に思えたのである。芸能、或は芸術としての誇りを持つ殆どの団体は芸振に入っていると云うのに、芸振の趣旨を肯定するならば、主宰者も又未加盟団体も、真摯な態度で再考しても良いのでは……。

ともあれ、我が喜多会では現在、宗家内弟子程の師匠はいないが、教士を中心にした数グループが、年三回を定期的に研修発展の場としており、会員こそ少数であるが、真に誇り多き団体であると自負している次第である。

基金鑑賞事業
ファミリー芸術劇場

津久見会場

芸術文化基金の初めての芸術鑑賞事業「ファミリー芸術劇場」が二カ所で開かれた。これは県内各地域の親と子を対象に優れた舞台芸術を鑑賞することを通して楽しい雰囲気の中で親子の新しい心の広場をつくり、あわせて地域芸術文化活動の振興を図ることがねらいである。

今年度、三カ所が予定されており、このあと、十月二十七日は宇佐文化会館で公演が行われることになっている。

初めての事業であったが、出演団体の質や内容面では申し分なく、すばらしいものであった。残念であったのは観客の数が少なかったことや鑑賞マナーの点でいささか音楽鑑賞という整然とした雰囲気がなかったことである。

この事業は、県内の文化団体で実績のあるものが出演し、可能な限り開催地の文化団体との共演を行うこととなっており、出演された舞台芸術を家族で鑑賞してもらおうというもので、その趣旨はすばらしいものと思うが、今後この趣旨に沿って、テーマ、日程、地域の実態、PRの方法などを検討していく必要があると思われる。

8月25日 13:30

津久見会場

〈津久見市民会館〉

出演団体　グループUNO、大分市少年少女合唱団、津久見合唱連盟。

プログラムをみると全体として出演者は水準以上のものをもっており、地元合唱団もふくめ充実した演奏であった。特に藤田喜久氏のバリトン独唱はじめ、グループUNOの演奏はすばらしかった。後半、会場の子どもたちが騒がしくなり出演者には気の毒だったが、これは、一緒に来ている親たちの鑑賞への指導もほしかった。また、親子音楽会としてのプログラムの選曲にも考える余地がありそうだ。特に低学年の子どもが多かったことは音楽会の前に、お祭り的行事があり、アニメーションなど視覚的なもので、気分的に浮わついていたことにもよるが、今後のこの企画での検討すべき課題でもあろうと思う。学校巡回公演とちがって鑑賞者の層に幅があり、自由参加的要素が強いので、聴覚的なジャンルより、視覚的ジャンルの方が向いているのかもしれない。いずれにしろ、文化は一朝一夕に高まるものではないので気長な取り組みが大切であることは言うまでもない。入場者約300人。

9月1日 14:00

竹田会場

〈竹田文化会館〉

出演団体　グループUNO、竹田市民合唱団、竹田市少年少女合唱団。

午後1時半ごろから小雨になり、出足がにぶく、開演を10分遅らせた。地元出演団体2団体は、よく練習を積んでおり、全員合唱もすばらしいハーモニーでよくまとまっていた。

グループUNOもプログラムを考えて、特にソプラノ独唱、バリトン独唱は会場を圧倒したようだ。舞台の熱演に会場から盛んな拍手が多かった。また司会者も会場にうまく合わせ、進行がうまくいったようだ。会場のマナーは、地元関係者もかなり気をつかっていたようだが少数の小学校低学年と幼児には問題があった。音楽会への幼児の参加は問題があると考えられ、ファミリー劇場としての親子の鑑賞という観点から今後検討が必要であろう。終了後、市教育長、各出演団体の代表者を交えての反省、懇談をした事は今後の企画、運営の上で大変有意義であったと思う。入場者約400人。

竹田会場

芸振と芸館へ

―各文化団体の起爆剤に―

―展示室の拡張を―

県美協洋画部長
芸　振　理　事
脇　　正　人

大分県文化年鑑（14号）によると県下の文化行事は1月に47、10月に70と記録されている。これをもとに年間の行事数を推測すると相当な数になりこの点では文化活動は積極的と思われる。

今後の方向としては数のうえで満足するのでなく、内容の充実に力を入れるべきだろう。マスコミは大分の風土と、人間性に根ざして魅力ある地方文化の在り方を示している個人、団体をたびたび報道しているがこの存在は私達に多くの示唆を与えてくれる。

それぞれが創造の起点をしっかりもたないと大分の文化はリトル東京になってしまう。活力のある団体、試行錯誤の団体といろいろあろうが、芸振がその目的達成のため各文化団体の連絡提携を積極的にはかり、起爆剤になって貰いたい。

創造し、発表したい。このことは絵を描く多くの人々の願いだろうが、発表となると芸館の場合はうまくいかない。個人、グループ、大団体とも条件は違うが、困難さは同じと思う。ここでは大分県立芸術会館の展示室の拡張についてのみふれたい。県美展の場合応募数が多く壁面の都合で厳選となり力作が展示できない。一昨年洋画の入選率は5割、103点は陳列されていない。昨年書道は1,172点の応募作品を大分文化会館と芸館の2会場で陳列する方法をとった程である。多くの作品が良い状態で見られるように拡張を希望する。

資料は各県の実情、○熊本県立美術館　常設展示室902.98㎡、展覧会場1,072.64㎡　○北九州市立美術館　常設展示室1,152㎡、企画展示室1,030㎡　○佐賀県立美術館展示室1,050㎡　○大分県立芸術会館　展示室1,234.01㎡「地方公立美館館は、地方文化のレベルを象徴している」という人もいる。

大分の文化財（6）

柞原八幡宮銅造仏像

（国指定重文）

大分市柞原八幡宮
（東京国立博物館保管）

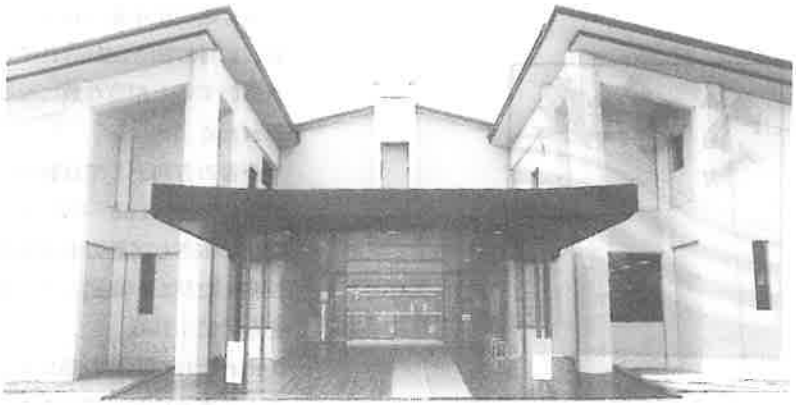
坐高三〇・七センチ、社伝によると柞原八幡宮本地仏阿弥陀如来像といわれ、頭部にら髪を刻まず眉は直線に近い単純な孤を描き、まぶたは厚い。特に前額から鼻筋が段落を作ることなく、一直線に強く通るのは、奈良時代前期様式の特色を示す。

首には通常みられる三道は刻まれず、後頭部には光背ほぞが残る。右手は肘を曲げ、第一指頭と第三指頭とを軽く接し、左手は斜めに下し掌を軽くくぼませ、法衣を全体に巻く。左肩にたくす衣のひだの折り返しのはしを蛇行曲線状にする手法に、独創的なものがある。衣のひだはやや煩雑な波状のくり返しに造るが、流麗なリズムがある。台座は、肉の厚い重弁の八葉蓮弁のかえり花が洗練されたうねりをみせている。

（大分県史・美術篇）

県内の文化施設

(11) 県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館



長い名前ですが、当館は、国指定史跡川部・高森古墳群を整備した「宇佐風土記（ふどき）の丘」と、宇佐・国東の歴史民俗文化の研究成果を公開する「歴史民俗資料館」とからなる文化財保護センターです。県費約20億円を投じ、昭和56年11月１日に開館しました。

風土記の丘は、駅館(やっかん)川右岸台地にあり、敷地面積が17万6,000㎡、九州最古（４世紀）の赤塚古墳（全長57ｍ）をはじめ、６基の前方後円墳があります。その中の鶴見古墳（６世紀）は現在、改体修復工事中で、９月末に完成し公開される予定です。

資料館は、鉄筋平屋建で建築面積が3,500㎡、事務・展示棟と研究・保管棟があります。ホール正面に日本最大の復製、熊野磨崖仏大日如来像があり、入館者を迎えてくれます。展示室は６つのコーナー、宇佐文化のあけぼの、宇佐の古代寺院、宇佐八幡の文化、六郷満山の文化、富貴寺の世界、修正鬼会の世界に分かれ、宇佐・国東の歴史と文化を概観することができます。毎年秋には企画展をもち、今年は10月19日から11月末日まで、「黄泉（よみ）の世界」展を開きます。

職員18名、うち研究員７名は、中世の荘園村落遺跡や宇佐八幡資料の調査、弥勒寺（みろくじ）跡の発掘、県下の職人調査などに取り組んでいます。

入館時間は、午前９時から午後４時半までで、休館日は、毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始です。観覧料は一般200円、高・大学生100円、小・中学生50円で団体は半額（小・中学生30円）。所在地は、宇佐市高森字京塚、国道10号線の風土記の丘入口より北２キロ、宇佐駅、柳ヶ浦駅より車で10分です。

（館長　工藤勝武）

芸術文化基金事業60年度の予算

収入の部

項目	予算額	備考
補助金	11,480,000	
県補助金	11,480,000	
雑収入	20,000	利息、その他
計	11,500,000	

※ 芸振一般会計予算(60年度)は前号に掲載ずみ

支出の部

項目	予算額	備考
芸術鑑賞事業費	4,700,000	
ファミリー劇場開演費	3,900,000	報酬、賃金、旅費、食糧費、使用料、印刷消耗費、通信費、運搬手数料
学校巡回公演開演費	800,000	
地域文化活動事業費	500,000	
文化キャラバン公演費	500,000	
補助事業費	4,280,000	
芸術文化団体補助金	3,280,000	10団体 59年県費補助と同額
基金海外派遣補助金	1,000,000	
事務局費	2,000,000	
事務局職員費	1,654,000	報酬、共済費、報償費
基金運営協議会	244,000	旅費、食糧費、印刷消耗費、通信運搬費、使用料及賃借料
地域文化団体協議会費	102,000	旅費、印刷消耗費 通信運搬費
予備費	20,000	
計	11,500,000	

市町村 文化活動の現状

三重町文化団体連絡会

ふるさと文化の向上をめざし20団体が集う文化キャラバン第1号の指定地にも…

三重町文化団体連絡会は中央公民館の指導の下、町内にある文化芸能団体でこの会の主旨に賛同するものをもって組織し、会員相互の連絡と研修をはかりながら三重町文化の発展向上と、その目的達成のため次の事業を行うことで昭和48年に設立発足した。

1．合同発表会の開催
2．相互連絡、研修のための事業
3．参加団体の援助
4．その他芸術文化向上のための事業

現在この会の加入団体は次のとおりである。

○筆曲（小笠原社中）（生田流宮城会）○日舞（由里一の会）（若鶴会）（みつば会）（芳水会）（瑳門会）（三美代の会）（のぎくの会）○詩吟（三重詩道会）○民謡（萬招会）（三重民謡クラブ）（梅若朝啄会）○洋舞（ゆりかご舞踊三重教室）○三味線（三重三味線クラブ）○生花（未生流）（池坊）○茶道（表千家）（裏千家）○居合道、以上の20団体は平素から各団体ごと月２～４回ずつの練習会をもち芸の練磨に励みながら「ふるさと文化」の向上をめざして毎年11月23日（勤労感謝の日）を中心に中央公民館で１年間の学習成果の合同発表会を行っております。

この会の運営については、総会及び理事会の決定事項にしたがって、１団体5,000円の年会費のほか町からの補助金35,000円と事業収益及び寄付金等で運営している。

今年は県芸術文化振興会議主催の文化キャラバン「つみ木座」公演が11月３日（文化の日）に第14回三重町文化芸能発表会と同日に三重町中央公民館で催されることになりました。この公演を成功させるため、何回となく理事会や役員会をもち万全の準備を進めながら各文化芸能団体とも合同発表会に向けただ今特訓中です。

（三重町文化団体連絡会 事務局長　阿南治吉）

補助金は１事業に　☆★☆★☆ 大分県芸術文化基金事業費補助金交付要項 ☆★☆★☆

1．趣　　旨

この要項は大分県芸術文化基金事業費補助金交付(以下「補助金交付」という）の業務に関し必要な事項を定めるものとする。

2．補助対象者

補助対象者は、大分県芸術文化振興会議に加盟し次の各号に適合する芸術文化団体等に対し補助を行うものとする。

(1) 大分県内に所在または活動の本拠を有すること。
(2) 一定の規約を有し、かつ代表者が明らかであること。
(3) 会計経理が明確であること。
(4) 一定の活動実績があり当該年度内において事業を完遂できる見込みが確実であること。

3．補助対象事業

1．大分県芸術文化基金事業費補助金交付要綱第２条の規定により補助金交付の対象となる事業は、大分県における芸術文化の振興に寄与すると認められる事業で、別表１に掲げるものとする。

2．前項に規定する事業が次の各号のいずれかに該当するときは、補助の対象としないものとする。

(1) 専ら営利を目的とするとき。
(2) 特定の政治団体、宗教団体、営利団体の宣伝を目的とするとき。
(3) 当該事業の実施に必要な経費のうち芸振の補助金を除く額を確実に調達できる見込みがないとき。
(4) 当該事業について国庫補助金又は県費補助金を受けているとき。
(5) 主として学校のクラブ活動その他学校教育に関する事業であるとき。

4．補助対象経費

補助対象となる経費は、補助対象事業に要する次に掲げる経費から、当該事業に係る入場料収入等を控除した経費とする。

ア．賃　　金　　イ．報償費　　ウ．旅　　費
エ．需用費　　オ．役務費
カ．使用料及び賃借料　キ．その他必要と認められる経費

2．前項アからカまでの経費の明細は別表２のとおりとする。

5．補助金の額

補助金の額は、補助対象経費について予算の範囲内において、下記最高限度額を超えない額とする。ただし特別の事情がある場合はこの限りでない。

	補助対象事業	最高限度額
ア	県単位の団体の行う事業	100万円
イ	県単位の団体に準ずる団体の行う事業	50万円
ウ	ア及びイ以外の団体の行う事業	10万円

附　　則

この要項は、昭和61年度予算に係る大分県芸術文化基金事業費補助金から適用する。ただし海外派遣研修事業に係る芸術文化活動研修事業については、昭和60年度予算に係る大分県芸術文化基金事業費補助金から適用する。

れんさい

スバルと人（その7）

菅　久

七回展（二十九年）終了後、創立同人である三重野一郎、荒木剛氏ほか四名が退会したが、八回には徳田宗忠、島川隆介、松野良治氏ら五名が参加して活気をとりもどした。

当時会報係をしていた江藤明氏は精力的に本職まがいのガリ刷りで情報を流したが、その記録によると、三十年からは春季一回のスバル展を、夏、秋、冬の三季にも習作展を開いて気勢をあげている。

三十年六月にトキハで第八回展を開催し、八月には別府市へ進出、流川下の新装県観光物産館で小品展を開いた。二階ギャラリーから見える別府港が特に印象的であった。その年の十二月にはキムラヤ茶房でも小品展を開催している。

三十一年になると、四月に機関誌季刊第一号が出た。「昂」（スバル）14ページ、スバル会に望むアンケートや県美術界記録と展覧会評その他。そして七月に大分県美術懇話会が町村会館で開かれた時、スバル会から広瀬通秀氏と菅久がキュビズムの再検討と題して研究発表した。その時配られた印刷物「CUBISME」8ページがスバルとしては二冊目の印刷物である。

こうしてキュビズムに関心が向けられた八月、第九回スバル展が再度別府の観光物産館で開かれた。出品目録に広瀬氏はこう書いている「個人個々の近代美術の多角的検討。感覚的でない質的そしゃく。その上での自己の確立、そして発見。創造のよろこび、意義、このようなつながりがスバルの心棒でありたい。〝如何に表現するか〟と言う素朴な言葉がヒシヒシと作家の苦悩として感じとられるような会でありたい」と。

そしてこの別府市開催の九回展を記念して「昂」（スバル）季刊第二号が岩尾秀樹氏編集で発行された。一号の広瀬氏編集よりやや形が大きく、表紙も二色で20ページ、内容も一段と充実して一号のタイプ印刷から活字の本格的なもの。ところがこの二号をもってスバルの機関誌は廃刊となったことはまことに残念。

一方江藤氏編集のガリ刷りスバル会報は一時冬眠していたが、翌三十二年四月に第九号が再び発行された。その消息欄に三十一年秋の新制作展で油野誠一氏が会員に、菅久が二紀展で同人推挙、古川栄氏同佳作賞、神田千里氏県美展受賞、三十二年春国展で木村昌斗志氏写真部会友推挙、岩男順氏大分大助教授に、などがあり、若き日のスバルをほうふつとさせた。

（芸振常任理事）

記　録

〈芸振後援事業〉

新世紀群35周年記念展　60年9月3日～60年9月8日
　絵画サークル新世紀群
「宇佐神宮薪能」と「献茶会」　60年10月3日
　テレビ大分
北原白秋生誕百周年の夕べ
　からたちの花が咲いたよ　60年12月11日
　白秋の夕べ実行委員会

お知らせ

10月　県立芸術会館（美術館）
所蔵品展Ⅲ　9月12日(木)～10月13日(日)
生野祥雲斎展　9月12日(木)～10月13日(日)
所蔵品展Ⅳ　10月18日(金)～11月10日(日)
親と子で見るフランス名画展
　10月18日(金)～11月10日(日)
〈文化ホール〉
大分市子ども劇場10月低学年例会
　10月8日(火)～10月10日(木)
グループUNOコンサート　10月18日(金)
大分県自立劇団合同公演「洒々落々」　10月24日(木)
県民オペラ公演「吉四六昇天」　10月26日(土)
大分県音楽コンクール本選会　10月27日(日)

11月〈美術館〉
第21回県美展　日・洋・彫・工　11月13日～11月17日
　書　道　11月19日～11月24日
　写　真　11月26日～12月1日
〈文化ホール〉
文化庁秋季移動芸術祭
　「松竹大歌舞伎」　11月16日(土)

発行所・大分市府内町県教育庁文化課芸術文化振興会議事務局＊印刷・㈱双林社＊題字・野田南風